

「げほ……ごほっ」

都会の空気は汚いという噂は田舎者の嘘八百だと、大学進学を機に地元を離れたマコトは憤る。確かに肥溜めの臭いは死ぬほどキツイ。しかし紫煙と排気ガスの大気汚染と比べると、死なないだけマシに思える。

喫煙者でごった返した朝の某環状線構内など、もっての外だ。肩が触れ合う位置で紙タバコを燻らせるたび、口元を押さえて大袈裟に咳き込む。ささやかな反抗だが、それだけ嫌煙者の立場は弱かった。

「んっ……う」

マコトの鼠径部に突然、強い痒みが走る。漠らしさを求めて伸ばした恥毛が全体に広がり、掻き筆った股間は酷い有様であった。にもかかわらず、慣れない増毛にこだわるのは曰く「股間の手入れなんて婦女子のすること。男だったら蓄えろ」。

とはいえ、見せかけの度胸しか持ち合わせないマコトは、人前でズボンを弄る暴拳など出来るはずもなかった。生娘のように股を閉じて、太ももを擦り合わせて誤魔化するのが精一杯だった。

「……」

下半身を振らせるマコトを、背後から見つめる男が一人。小さく引き締まった臀部が、発情期の雌よろしく左右に揺れる姿を、男は舐め回すように目を動かした。

自分の身体が品定めされているなど露知らず、マコトは到着した電車の混み具合に辟易する。次にやって来る電車に乗ることも考えたが、後ろから押し寄せる人波に抗えず乗車してしまう。

この時、既に背後の男——ノボルの策略によって、並んでいた列とは異なる車両に誘導されていた。その意図を、これから毒牙にかかるマコトは知る由もない。

初夏の電車に立ち込める澱みは、マコトの胃に収まったものをこみ上げる。この調子でアサガオが咲く季節になれば、冷房の付いてない車内はどうなるか……余計な想像をして目の前が真っ白なり、縋るように吊り革を掴んだ。

「夏までに、自転車でも買いに行くか——うふ」

食道が焼けるような痛みにマコトが悶える。せめて正面に座る女学生に朝飯を掛けないよう、ズボンからハンカチーフを取り出して口元を押さえた。大学の最寄り駅まで、この公害地獄を耐える他ない。

こんな時間に女子とは珍しい——マコトは座席に着く女学生を眺める。

艶のあるストレートロングは胸下まで伸びて、乳房の立体感が強調されている。透き通った白肌にはニキビ一つ無く、男衆の血気で頬は微かに朱に染まる。分厚い書物に見え隠れするが、その面立ちは眉目秀麗と評するに相応しかつた。長いまつ毛にどんぐりまなこ、小さなお鼻と潤った唇からは色気が滲み出る。

これは、これは……要するに美人である。マコトの鼻の下が伸びるのも致し方なかつた。口元のハンカチーフが隠れ蓑となり命拾いする。

「ああ～たまらんっ、誘ってやがるだろ」

そして、邪な空気を醸すのはマコトだけではない。にわかにも熱を帯びた乗客から、下卑た欲望が漏れ出していた。

「へっへ、耳を赤くしておって。かわええ声で鳴いてくれそうや」

「こいつは締まりそうな穴に違いねえ、はよう可愛がってやりたいわ」

声色から察するに安酒で喉が焼けた、碌でなし共に違いない——マコトは凡夫の野蛮さに嫌悪すると同時に、標的と思われる女学生の身を案じた。この臭気で彼女が孕んでしまわないか、心配で堪えなかつた。

その碌でなし共が孕ませたい相手は、よもや自分自身であることなど考えも及ばず——電車は急カーブへと突

入する。けたたましい摩擦音は車内に大きな揺れを起こし、多くの乗客は吊り革や手すりに掴まる。

「くっ——」

マコトも命綱を放さまいと強く握り締めた。尚も遠心力に振られて倒れそうになり、女学生に覆い被さる寸前で踏みとどまる。

「ん——っ!？」

しなやかに仰け反る背中から美尻にかけて、妖しく撫でる感触が走ったのは、その時だった。不意の衝撃にマコトの身体は強張り括約筋まで力んだ。

身動きも取れない密度なので偶然、誰かの手か肘でも当たってしまった、いわば不可抗力……しかし単なる珍事、偶然と割り切るには、別の思惑が宿った力加減でもあった。

自意識過剰かもしれない。第一、男に猥褻行為をする輩など何処にしようか。読書に夢中の娘が目と鼻の先に居ながら、見向きもしないなど考えられようか。

「ッ、うう……！」

魔の手は再び伸びた。

今度は太ももの裏を硬くいかつい何かが摩る。マコトが恐る恐る股下を覗くと、脂気が失われた手の甲が潤いを求めて、ズボン越しでも見境なく纏わりついていた。

この、変態野郎が——マコトは沸き上がる激情を辛うじて抑えた。いま振り返ってしまったら犯人は雲隠れして、地団駄を踏む様子にさぞほくそ笑むに違いない。

ならば、今しばらくは——遺憾ではあるが、このまま泳がせた上で、次の停車駅に着いた時に引っ捕らえる。電車から降りた後、煮るなり焼くなりしてやればいい。それがマコトの皮算用であった。

「甘々や」

「えっ——ン` お……う！？♥」

貧弱な目論見を嘲笑う、尻肉の鷲掴みが鮮やかに炸裂する。よもや痴漢自ら姿を表すなど全くの予想外で、一瞬の緩みを突かれたマコトは、喉奥から望まない声色をひり出した。

「あのお、大丈夫ですか」

しまった。思いがけない展開に仰天しているところに、怪訝な面持ちの女学生から声が掛かる。よもや痴漢に遭っているなど言えるはずもなく、身振り手振りで応えるのが精一杯であった。

「フッ、愛い反応しよる。そんなに待ち焦がれていたんか？」

「誰、があ……ヒッ！」

耳元で囁く変態は、卑劣とは縁遠い硬派な印象だった。深みのある漢らしい声色に困惑するマコトは、鳩尾の辺りから忍び寄る手に慄く。

指先から手首までの皮膚が醜く破けていた。指の第二関節は大きく盛り上がり、かさぶたから血が滲む有り様で、堅気の者でないことは明らかだった。

「ノボルの旦那ァ、今日もオメコの前でいなせだねえ」
「おう、おめえらも準備しとけや。一周するまでに固めっぞ」

周囲の下衆からノボルと呼ばれた卑劣漢は、戯言を交わしながら手際良くマコトを手籠めにする。

「やめ、ろお……っ、変なとこ、触んなあ」
「おお、口答えするんか。だったら、はよ、振り解いてみろや」

マコトを抱き寄せる腕に暴力が宿る。シャツのボタンの間に差し込む右手親指と中指が乳頭を摘めば、尻肉を掴む左手は爪跡が残す勢いで揉みしだく。

「それとも助けを求めてみるか？ 目の前の小娘に、僕ちゃんの身代わりになってください、ってよ」

ノボルの芝居がかった挑発に、オーディエンスも呼応するようにせせら笑う。

「馬鹿に、するな……あ！ オレはこんなのに……
んっ、う……屈したり、しないい」

「フッ……スコスコに弄られながらナニ言っとんや。お前のタマなんぞ電車乗る前からバレとんのじゃ、阿呆」

態度こそ毅然と振る舞うマコトだが、その実、虚勢を張っていることはノボル以下、男衆全員が初めから看破していた。

ここにきてようやく、自分が性的対象として視られていることを理解し、その人の数の多さとサカリ様に震え上がった。

「チッ、あいつら先走りよって。乳首のよがり声だけでコキ出しやがった」

ノボルは周囲に目配せして愚行を止めさせる。ほんの一瞬だが、マコトに向けていた意識が外れた。

この千載一遇の好機を逃すわけにはいかない——いよいよ余裕が無くなったマコトは恥も外聞も捨てて、書物を読み耽る女学生に助けを求めようと試みる。

「あふあ——っむぐう！？♥」

マコト自身が嫌悪するほど、酷く情けない声を上げようとした。その一拍子早く、喉の動きを察知したノボルが遮る。

破れかぶれで姑息な策など、百戦錬磨の変態には通用しない。また幾多の経験を積んだノボルは、活字に没頭する人間の集中力を理解していた。

故の、大胆な口封じだった。乳房を弄っていた右手を瞬時に抜き出し、開こうとする顎を掴んでは強引に振り向かせて、文字通り塞いでしまった。

「んちゅ……っ、ぬちゆる……んゾっ、ぶふ……………
んぐ……ぐ、ぐう……………！」

ノボルは乾いた唾内を蹂躪すべく、上歯と下歯の僅かな隙間を舌で抉じ開けては、奥に潜む臆病者と乱れまぐわう。口唇が密着して水音は漏れ出さないが、マコトの鼓膜には卑猥に跳ねる唾液が鳴り響く。

「！？ ～～～～ッ、ぐ、ぶ……う！ うぶ……う、う……………んぶ、つく！ ふっ……ぶ……………！」

マコトに襲いかかる性戯の手はエスカレートしていき、内股で挟む男性器へヌルリと這いずる。イソギンチャクの触手よろしく、指先をなまめかしく踊らせて陰囊に絡みつく。

おもむろに握り締めると睾丸の熱と脈動が伝わり、ノボルの機関車からも汽笛が轟く。

「出た、ノボルの真空タマ搾りっ。アレされたらどんな奴でも、スコスコの骨抜きになってまうんや」

「せやのにノボさん、一回抱いた男はもう相手せえへんから、これ食らったノンケは二度と満足出来ひんな」

急所を取られて悶絶するマコトだが、実のところ自分が今どうなっているのか、把握出来ず取り乱していた。

金玉を掴む手は一見握り潰さん形をするが、実際は優しく包み込んで愛でている。

真赤に腫れた乳肉はその反対、乳首まで引き千切らんばかりに、乱暴な手つきで扱われて、痛覚と快感が出鱈目になっていた。

「んうん……………ふぐ、んう♥ ん、ん…………ぐっ、う…
…ふっ…………う、ふっ…………んんっ」

そして頭は——惚けていた。息も継げぬ接吻の中で微かにくすぐる、晴れやかな柑橘や石鹸の香りが魅了する。

痴漢に対して臭い汚い穢らわしい等々、あらゆる限りの悪印象を抱いていたマコトにとって、ノボルから放たれる媚香は摩訶不思議の幻惑だった。

こいつ、相手が堕ちるスジを知り尽くしている。このままだと——マコトの脳裏に、受け入れ難い事実が浮かび上がる。

「威勢良くイキってたのが嘘のような蕩け顔やで。さすが檻のヌシ様じゃ」

「んぐごごっ……………ぷはっ！ なんや、えらい生意気な口を利いとったくせに。おなご抱いとんのかと思たわ」

「う、る、さい……………はあ、はあ」

「おおん、随分と苦しうやのう」悲鳴を上げるマコトのズボンに、ノボルが手を掛ける。「そら、助けたるっ」

「待て何をする」

マコトは力を振り絞り抵抗するが、暴拳の前に敢えなく屈した。下着ごと剥かれた下半身から男性器が露わとなり、ノボル以下男衆が息を呑む。

「おい、なんや、あれ」

車両に線路の繋ぎ目を過ぎる喧騒と、知識をめくる残響がこだまする。たおやかなる蔓が異変に気付いたのは、深まる見聞に一拍置いた時だった。

「なに、このニオイ……」

顔を上げた先に広がるのは、眩い朝陽をも吸収する恥毛の樹海と、しおらしく蜜を垂らす純潔の蕾であった。その先端に真赤な実を付ける宿主は、奸悪なる蔦によって辱めを受けていた。

「—————」

如何に聴覚からの情報を遮断しようとも、呼吸をする以上、嗅覚からの情報は免れない。マコトから放たれる卑しい熱気は、多数のリビドーを掻き乱すが、可憐な白百合には虫唾が走る光景であった。

発狂する女学生は駅に着くや否や、倒錯の園を掻き分けて降車した。嵐が過ぎ去り閉扉した車内では、ノボルを中心とした喝采の渦が沸き立つ。

「あのアマあ見たか、初めてチンポコに出会ったツラしよってからに。生娘ぶっとんちゃうわ」

「いやこんなチン毛ボーボー、見たことないわ。だは、は、チェリー丸出しやんけ」

嘲笑の矛先を向けられるマコトは、見ず知らずの異性に見られてしまった羞恥と、発端を起こした元凶に対する怒りで、怒髪衝天の面貌と化していた。

「くそ、お前ら○してやるっ」

「ほぼ裸で勃起させとる変態が何言うとるねん、阿呆」

青二才による必死の威嚇もまるで一蹴するノボルは、輩の馬鹿騒ぎで掻き消されないように耳打ちする。

「あの小娘はな、俺らが仕組んだ罨やったんやで。この『淫獣の檻』では基本、女は締め出すようにしてるんやが、わざわざ今日のために席まで導線作ったんや」

ノボルは自らの熱棒を当て擦る。

「察しの悪いお坊ちゃんのために教えたる。お前が乗とるのは野郎でしか勃たへん、好き者ばかりが集まった車両でな。女がおろうとノンケ相手やろうとお構いなしや」

「ああっ……？」

「まだ分かんのか？ 『なんで自分だけこんな目に』
なんて思っとるやろうけどなア……ここにおる奴ら全員、
ず〜っと前からケツ追っかけ回しとったんじゃあ！」

「ん おう！？♥」

乾燥した破裂音が満員電車に反響する。宴が始まる号
砲に、乗客の子種はますます萌え滾る。中には先走って
戯れる者も居たが、もはや誰も気に留めなかった。

「は、は。綺麗に痕が残ったで。

なあ？ ——E大学D学部のマコトくん？」

「なっ、なんで僕の名前を——うああ！」

身元が割れている疑問を、ノボルは絶景の名所を生み
出して有無を言わせない。マコトの双山には真赤な紅葉
が色付いた。

「ッ……ウ！」

「お前なんぞ青いケツ穴の皺までバレバレ、文字通りの
丸裸や。田舎の母ちゃん泣かしたくなかったら、せいぜ
い気張るんやな……おいっ！」

ノボルが取り巻きに合図を送ると、一斉に遮光カーテ
ンが閉じられた。車窓には『使用中』と書き殴った紙が
貼り出されて、傍目には珍妙な光景であることに違いな
い。

痴漢と好色で溢れ返る電車には、むさ苦しさとしりつ
く紫煙が充満する。それは、マコトに逃げ場など無いこ
とを意味していた。